鑑觴無底抄

特別
へ12
1077
12

宮城縣立圖書館
利
1.077
ヰ12

A12
1077
12.

花散里

廿四歳　八月より十月まで　さうしの巻

未ちりそいけるうおれ事や

夏秋　廉景殿女御許に次る事

川女家前ハ事

廉景殿ハ故院の女御　花散里乃

姉也　中川の女ハ不見系図人

於廉景殿女御許　逢三君　結ル　始事

三君ハ花散里ニ

花散里　以寿為巻名

橘の花の香りなつかしう月ともこまれば
散里とあり行くすゑ
源氏君のおもせて号とし源氏
里の名をもつけ事とさるはの美乃
サ里に家あり月は事とさるはの美乃
まもなく夏のことなれば六月を
月もまもなく出るあり名を
は美をさう美は里の流れ名

事とて人てくるあり　年月

元

柳巷民サ　世間に業平の夏と山巷七月

夏の事とをもうり

或物さうまれ巷よ　風雅なる三人あり

山里を徐信りうもり　風雅のあるは

あわてやうく　清子のうつりひあり　俳

情なきあるもし　又風雅なる　三人

きうく　行よつき　思ひ人なる　のうち

私は人の事　此事よりて　山里

故り　花ちる里とをいふ　素圓の句巷

河方

花咲里といふ　詞を

梅は花ちるさとにかりひは　山里

花とそうの海せんうも

交集

時雨帰て　月数と　寺巷の　花咲

里まもむ人やあき

何
なつかしハ
てつらう
ちゝ
ちゝ只ひと
ら

人きもとれなかりしさは
秘 源乃只春童 朧月東山
心をけ今 なくさの世みつを
てちりうたゆ只みあ
色白妙日我ゆ
しとを
寄
図書なと白妙日とけ
れ好色うさの
年く只今ハ世中の
思ひきりてあてけりう
世とれなを
色ゆ後院のかくれ
ちりまれ事なと
ちりて
きたりなりきたれ
けちり世をちむ
ちなり東宮 冷泉 紫上なとと
なりて
きい年いてんとちりそ

秘

舞京殿女御こ

桐壺院の女御こ花貴里乃す

と申し出さんとそこ

花ちる里の姉こ 春月

見こ為ちるもそも

桐壺かと見るをいてきけわーせ

花ちる里あをはるー

伊らくあくしなり

はるかなるもそなよゆこ

ちくーー行ちるこ

伊れたくんみく見ーちと

はるとの三乃君

御のいそらこそ

花散里乃事や伊の通ひ路人や

ちくもくー行ちるみ

ちる里伊ちめくーー初めし

をもたれ又ちまもくーて也

人の伊うとの

はゝ花貴里かとゝ多海さうなる海事み
て女のゝこゝろ心とりこつて見へ
はゝのゝ事なる世界みうゝ世界
あゝれのゝきりゝ
世花ちう里の事みて毛なひゝ
ゝれゝ式只今ゝふや屋と物あ
ゝ毛みむ物つゝを行ふ異ひゝ行
ぬゝ世ゝれあゝりさ海へ
ゝさゝ毛ハ図書館へ あ年のゝれと云

志ゝひかゝうて
思ひ出ゝあゝれの場ゝ
ゝゝ
八月ゝ元めゝう
おゝゝろゝ書籍へ
ゝたゝゝのはゝゝ
の毛筆へ 毛彩筆へ
はせんゝゝゝなゝ
前近ゝゝゝ

なら川の月と　中川心

秘　京極川せ　番匠やなかわ

さゞやなる家

秘　ちいさき家心　狩こゝはまこちいさ

或抄　小ゝせ

ゝ四心

ゝ抄ゝ紙あ

何　和琴　能鳴須あり

秘　和琴心

和琴をあ

あつまゝとゝ不審乃事や

ゝハ絃のあ

ゝゝ写ゝ

此写をゝて

ゝ写あて

と不審ゝさにあゝ

又ゝなゝ

ゝさあゝ

さて不審なる事あり是三ツはよ
ろかり契りとて色にかか
きあくるもの〳〵いとあり五月雨今
薬の御流心動変事〳〵
ちいて
秘
車ちかく伝さて保くあるせ
門ちかくハあらをせ松の
さ海あり〳〵しあ
うつのまれとも凡みまつりれは

国書頒義参の法と思ひ付ける
桂ハ蓼とそ除也
河
天雅彦門之湯津楓樹 日本紀
或云馬津桂木 日本紀 門ム楓とも
如ふる光也流桂
年一度こ去西ひ
元
ふちさ〳〵出〳〵海ム道中川り
ての事や光氏の若葉き
うみかちひ海ム所こは美とり

秘

山家集と云なり 俗のことゝ
詠人多し 山時代 俳諧
多の物語 紫式部日記
かゝる所多り 時代新
成一 年日

年中行事
なる式部日記 うれかしいとうの
四月俗の巻

はるのゝ草
あるくしきかとゝ
はなりなきゝ四月一

はる巻

色うてみ
かゝる草をなれてきれるより
さきてかか

関云山家集 俗 時代 成四月一
のことなり

或物頃 みゝ物語 ゝ

こゝなるめしさらしも也ゑもしろか
たゝしいふみ候ゆへ一りうのみ
たあられ
御車をしるさるを
秘
源の車紋の門の前へとし置
まちや
まいのまれ先　御れ御使りか
まさ為へし
とらへつれ之秘　出くまゐ郭ほの

かうとし宿の塲所なり
花
とらへ之わた万葉なりて百千夜と
うちわ
かのうつ記しを以ゆゑなりしか
まい済しと云かれて多わをとら
ゑまハ百千夜とけり塲ふ塲也
して待なんとしつましとも河
まりみ多へとうして四ちまそまし
はつ細上 別ほ入
札とらへ之わハ郭ふみ以之詞にて候

雁はとこよより鳴といへり
志んかにはつかりきこの
ちいさき家のてんしやう人なつかりよ
古歌の弥ハ志んてんと和歌しより
ゆきくそこなし　しなされん
秘 惟光と大門の女房たちをあいよ
都ことして遣
惟光の御ふさきしく申すなり
なきハ志らんとおもひてこハ流しる

花散里
おほかるなきし
源氏の御ことくんあそびしみられる
とかうみいそやそうさへ候まりして
古あしきと　又此人をいやめし
さいわいのこころしいわ
左同より
郭公志てしよふこゑ志そをそれ笛きこしほお
桂木の家中川わたりにて
月のなか又月の光
秘 門よりれかつかはし　此時ふ候らし

[illegible]の[illegible]
[illegible]
式部卿宮[illegible]
[illegible]
[illegible]人[illegible]
[illegible]三[illegible]
[illegible]
[illegible]

秘
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

因云川の内惟光もかゝめくこと 弁日
私云う角てうきゝとハ源氏
角てゆう人なれとこゝの名う
物と見くさてをかゝ人をと
をあくこんをかくいふ

人一まあたりも

秘 四の女四之今をこゝ移ん云も
あらうしと

日 此人きまをこゝ此その数据よ人

きまあたれ四所うれおあとりさと
ありうとの女やうよ人をあ
きておうけうきれあ角此
別あくあくうんう一一
祈うをあれめを

弁 惟光うをうなまりあうと女の
祈うう四角此川角うく叶あ
さをけくむきまを事をう

秘 惟光う角此此従久くを此ハさ

[illegible]
私云此義めも只源氏物語中と見えて
しとやかなる人なりとあるを見て
[illegible]
あるべきなり
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

何
本朝月令曰五節舞者浄御原
天皇之所制也事載之女芙
蓉
大蔵の[illegible]
[illegible]
秘
源の始終[illegible]
[illegible]
私
大蔵只今繁昌[illegible]
[illegible]
[illegible]

序みいだせるゑし唯今中河
ゝりの人同しゝ家ゝ人をこそ
ろうあ一みせらをゝむへし
はとハゝ海をくやとハ者哉（モノカナ）と也
者哉（モノカナ）を
伊ゝ物ゝみはきてを
ゝあゝみはをさ海ゝ公とて
しまた同しゝを
中くあゝゝれ人のねゝ公ゝを

秘
くゝ海ゝゝ海さ人をゝみ
ゝをすをつき海ふゝりて人の
ねおゝをゝゝをゝを
中くゝとゝ字おゝゝゝ
かいの事は

秘
藤景殿の御ゝ花菖蒲
をゝりみゝをゝ
ゝ海ゝ海ゝゝ海
ゝ海ゝ海の四ゝ海ゝゝゝ人

ちなくあきくさ面せ
あるなり
源の公せ
女御はれりとみくく
秘 簾京殿のくさ
むくのはねうくわ
桐こかくのはは代はすうう
ハウカ 廿日はれ月くいはる
秘 五月のはねわ多ゑ雨はさ海おい

廿日

いくくまあうきうあうくくこくくう
新緑もは時方一位前わあ拾はの
いくせいつわ花多はまくう
くあくくこちくうくくわとあわ
てこちあうもくくきりや
まあ地はたうあ浅くくくし
ちくくくくち花のくわ
何 四史云 孟仁天皇九 辛酉春二月庚子

朔天皇命曰田道間守遣常世國令
求非時香菓今謂橘也十九年秋
七月朔天皇崩明年三月間守至自
常世則貢物也非時香菓八竿八
縵焉間守於是悲歎之日受命
天朝遠往絶域万里踏浪遥度弱
水是常世國則神仙秘區也俗非
所致是以往来之間自經十年豈
期独陵峻岨之更向本土乎然頼聖

帝之神靈僅得還来今天皇已崩
不得復命臣雖生之亦何益矣乃
向天皇陵叫哭而自死之群臣皆
流涙也間守是三宅連之始祖也
橘くむかし我ふつまし女御の
むかしおもわかりの杉ぬしおり
ろきさゝ海之
もくれてそれやうすうれおほしきわし
秘
相逢の帝れは羅のかゝ代今思ひ

出羽さこの乃うあり海花ちる里
上ゆく仏うなる
うらなる
原のなさ
ほとゝぎすあわつるかなの乃しや
花
中川の月
松
たゝ一つ海さ
世界の海世口の月さいてあり
もせ行の月乃時ゆゝ
ちれ月花ちり時ゆ

乃時ゆゝ伊ひ行ゝ
ゆゝ
たゝ行ゝ海ゆ時
おゝふなゝたゝゝ
月ゝあゝ乃時ゆ
ゆの四ゝ
ゝ月ゝ
ゝ月ゝ
月ゝ

いうみ三わてゑ
伊勢物語
伊勢ノ一への事かくこと時ものいたし
つまてうゑ
私云秘りそいうみ三わてうゑ明あれ
ゑゑおわ古今ニハ物うしろ歌
とりわけわ歌ノみ明ゑハ
命をいとりあわてなくきれ
ゑかゑ風うみゑゑ
ゑ代ゑとハ海ゑせてゑ

しのあの墨をなり物ゑあとゑれゑ時
ものゑ明ゑといゑ
川ゑみハくゑかへり
原
ゑゑ花の者をなりゑ部ゑ部
ゑ星代ゑ神くそゑ
可
梅の者代かけうゑ時ものゑ
して明ゑ日ゑなれ
万
ゑ地ゑれの花黄里ゑかゑひゑ山
時ものゑ海ゑんゑ

貫集

ゆくとても帰て日数を梅の花ちる
里にすむ人やなれ

万

うらむとのなとこの中のかなしきに
身をわすれてもやらちにみて八
かられもやくらみにてハなかれ
られ花のさけるめくりわれるかわ
きぬれとよはしなちとなれ
花をぬらしさひにかれにかけて
こしらしこれハせんとさくかれ

ちる風にれ　花なちなれハ・
すミきれる

梅のうさなりとし
構の花ちる里りし
古今二首とわ合なるあ之
春の名笠よわ出なわ
松二首なり河海ノ抄あ之明之
松あの中ハ梅ハむりしさうるつま之上巣
女御なりてハ東院の流代なる事かり

合てなくさまとへ人かのそれをか
はらく思ひて多佐詠まれかさう
とも郭公の橋をとそよりは原乃
たりあるを事成多くてありひと
乃く結つるこは尼の袖りてそれを
人てあり
伊勢尼の忌まきさき
花
ちまきより原氏は袖せ
松
原の女御へ中結と業之

よく散州長へき事尺て多ち
こりうとうとうとうとうひ
弁
こ事は世ともいさありのよ絶へし
よのうとうとあるあるこ
二ちとうとの時猪のあるとしおそうて
ものもてうとおさうとうとうとの乃
うとうとうとうとうとうとうとすし
うちあるて
公乃出発あうう
松原せ弁

秘 源氏ノ書ノ事トノ説ノ事

ゝ説ノ事

秘 源氏第十ノ説方（ゝ説ノ説ノ事

宮ノゝ説ノ説ノ

秘 墓地

花 ゝゝノ説ノ事也之ノゝ説ノ説ノ事

葉 源ノ説ノ中也太上天皇ノ説ノゝれい

ゝゝノゝとノ説ノゝゝゝ

とノゝゝて説ノ説ノ説ノ

事ゆへゝとノ説ノ説ノのノ説ノ

説ノゝとけゝゝノゝゝゝ説

私源ノ説ノゝゝノゝ説ノ説ノ

くゝノゝゝゝゝれい説ノ

ゝひゝゝノ説ノゝと説ノゝ

いとノゝゝノゝ説ノ

説ノとゝゝゝゝゝ

墓ノ事ノ説ノゝゝゝ

やうや

二月廿のゝちとしはかさ

二藍　直衣

かさりとそてとれあさうさくてて

衣裳ときぬきて亟衣ばかり

とそてとしはかなさ　第三とけなさ

常し

おされさうのうちとみとし

とうふしうりの二ツうりのときの

事や

何海ふんしたまり

同云うりる二ツうての事しなり一芸

あさうさとれのみとし　物典

ひとくなりいさてらいさく

ひ秀れへる　ものとわ紬のやうに

さすりやあさりとうふうられと

もるとしとうきねん

けりあとなる

秘 ゆゑ 柏木の事とんとうちて
こゝろ行へうもしらず
中なるなり
秘 腹中也
義 又腹ゐとうもつ
今をこそ世よう
蓋い柏木もうも腹よ結のわるし
いとゝ知りえのつ
花 柏木は月つきに似るとうも
知ていかゝ
源の蓋は柏木に似ると
とうもんとも
りうもうゆゑ
柏木は事と非蓋よとする
ちゝ知ていさうり
秘 紋仕方
よとみのうりてゝ
行 ゆゑ

いそれうて
秘 夕霧の名をちらへしとひのふし 弁
名をへさへ
かり家の名をへよしとし
またへうとうかれなれて
秘 紫上の流芳し 弁
よへの一条家
秘 夕霧後へ流ありかまあると
かし家もて

秘 夕霧はすきる名をとありひのそ
むかしの事
秘 ふきさ事いふくのやまり 弁
かたしのまんの名をへい
花 是ハ源氏よ夕霧は一条の家へ
ての事に結ひまかり女二宮のさ
う物まんの末つきをつけかり
をもかるときこしありやそれを
源氏は批判しなりて 想夫恋と

こゝろもとの用意ありてこそ思ふ
意せぬれば
秘
源の須しなとにわたれるうへ
おりゝの事うちとけ
并
源の須しいふ死たりしかとも
思ふ意の心よりやあらうへきおりゝ
ゝとうりの事ふ意ハ世来うへ
いふしこの事しとりてり
ないふとゝの心よりうりの

為業の意ふ意ひきのゝ為ひき
ねうれいふとれりと源のあり
ふとも

すきゝかれうて源きゝとゝれを
秘
少書とゝ為て源のりのふ
須し并
人母ゝ思ねとうゝ
ゝ思ねいとりゝ
しりとうゝ

并ハ世ゝれ

おのゝ〳〵ゐなざまして

義 相手は遠言ゝ葉をゝの意うるゝ源のそ源

をゝて之ゝ乃乃ゝ

ゐゝ人のゝは

義 ゐハ少事のゝ

さまゝ源氏君は人のゝ

はゝゝ

のゝいゝゝ

秘 少事の第せ源の源勇のゝ

さゝゝ

何ゝゝれゝ相ゝ世の

ゐゝれと

秘 少事は源ゝゝ世事ゝゝ

ゝとゝゝひゝ中ゝゝん

ゝてゝゝ源ゝゝ

ゐゝゝ相ゝゝゝ

乃ゝゝゝゝゝ

花
上の句よ色みつしかさ此仏さししと
三れもてうしうりき用ミうすと昔と
子まてうるを心こしうきとられて
秘
今名えくるのに結ぶ人もとうむ
つきとし
祭
かんぞ　嫌数　ゆひをさしう
名ふりすや　祭関
何ふまえんいさしゑて
秘
夕暮はすゝめのひしよまひ

貴賤のひゝる事されいかくかう
ぬ事とし
弁
こゝろすこし見於つてそあり純
さのミいそや人のまり事ニ
よりそうるをよしとし
ようひをるやうしいそこうびな
とる物しおのは
祭
落葉の年齢の事し又さ此あり
さ詞うさとき夕暮のとのすて

秘

年乃れとものこうひ行はれ
てさうるてしかるへきもの
まとし
又おこれうのうしてさしけし
寄
秘
わうとの実法うるにうてつまり
うすしのうへうとし
私蔵美のれ年もうてらしたのの
実ううきはうりうあうの乃
さいうくうとうも法るつまうう
うしうるかてし美ウ音の実法
て用法めうねれうしはまり
ううとうらとけうとしても付
美ウ牧羊のつうき蔵美の実法
うるにてこうくうう
美
少音のうくうこれうこれ
と十ものうねやうるありしてく
いうも

もてしたくぬらはしてその義なりけると
花 すこしちかくまりけるはとふかの宮の
源平の御弟ちかくなりけるかよし
一条の息所のいとこありける御を
ならし後桐壺の御子よりしてこそ
なとよろしけれと申けるにやた
秘 まさなん
の義ハ御弟の事也
おもしあるへし
箋 源心

秘 源氏御弟をこそいひつゝて
桃花御弟ハことにあるへきさ
花 是よりハ源平の御いとこなる親王
かかハ陽成院の御弟とされとも式部卿の宮
河 此式部卿宮ハ陽成院の御子也
有定ハ彼宮の子也これハ元長親王
二宮式部卿 母王氏 元利親王 三宮式部卿 母同 両人ノ
間須但此人々強縁不審不同
如何案之南院式部卿貞保親王

事須此大王絲竹之長者陽成院
御弟也尤有其寄須又云此式部
卿之い極楽寺院又 相模御門御弟
事須彼貞保親王に撰ス可須
南宮式部卿 貞保親王い留之達
者也清和之御子母二条后陽成院
之御弟也之れと紫上花文式部
之りるすべてそれ月の人
ゆ有りしものすべ

秘 桃園うへ 花鳥 紫上文とそ
為紫上花文いいもうと薛せし
故式部卿いらつもうと
貞保親王事 兄河海 桃園式部卿
萩の宴せしとも 貞保
たとへてのすべ
しかは紫上なる為
之云沈陽成院者桃園に遠
花 式部卿 紫文有故之 但薨
為

業平朝臣式部卿宮上皇に准ずる
身の程なく花を愛で

萩乃元紀
式部卿宮萩宴事　下勘
業平
桃園にして宴有ると意得べし

女院のうへ
御息所
御息所とは母儀よさりとの意なり
と詩のおもむきなり
来世のつゝいとうらやましき
恨
源の元紀
花
夏中に立てり菊作り
のとうらやましきのよりさ
つゝ人なんとあるし事也

同 源の九郎は節と義経とをあらそひとりつ
これ義もいとうふうき
秘 少将よりは義経海内をしたがへしと源
の形勢なれば
これ此事ときとゝ聞
見 見よりいか少将九郎
とゝまもうち出ゝ給ひしと
義 少将九郎義の事と云ふうち
ゝ聞ひすゝを源九郎
は義経にはかりてとゝ
元ゝ
せ
義 ゝ九郎 柏乃少将
ゝ
いかゝ
見 少将節の事ゝとの次ゝ知盛
ゝ

しうせ申ぬるとて乃次て来
門徒のとりのさはきてはなはてるを
せしに事ともと源氏ようてうを
今はりひいてそうをうをうを
節とをうをうをうをうを
とをとせしにうをに
相手絶望をみきりみとし
はて事相手巻をよりてうを
はをつをとをうをと

花源の伝

源乃伝をされつよりを音いをうを
をとし 義周

をををををををををををををををを
源の伝

年
乃音を伝

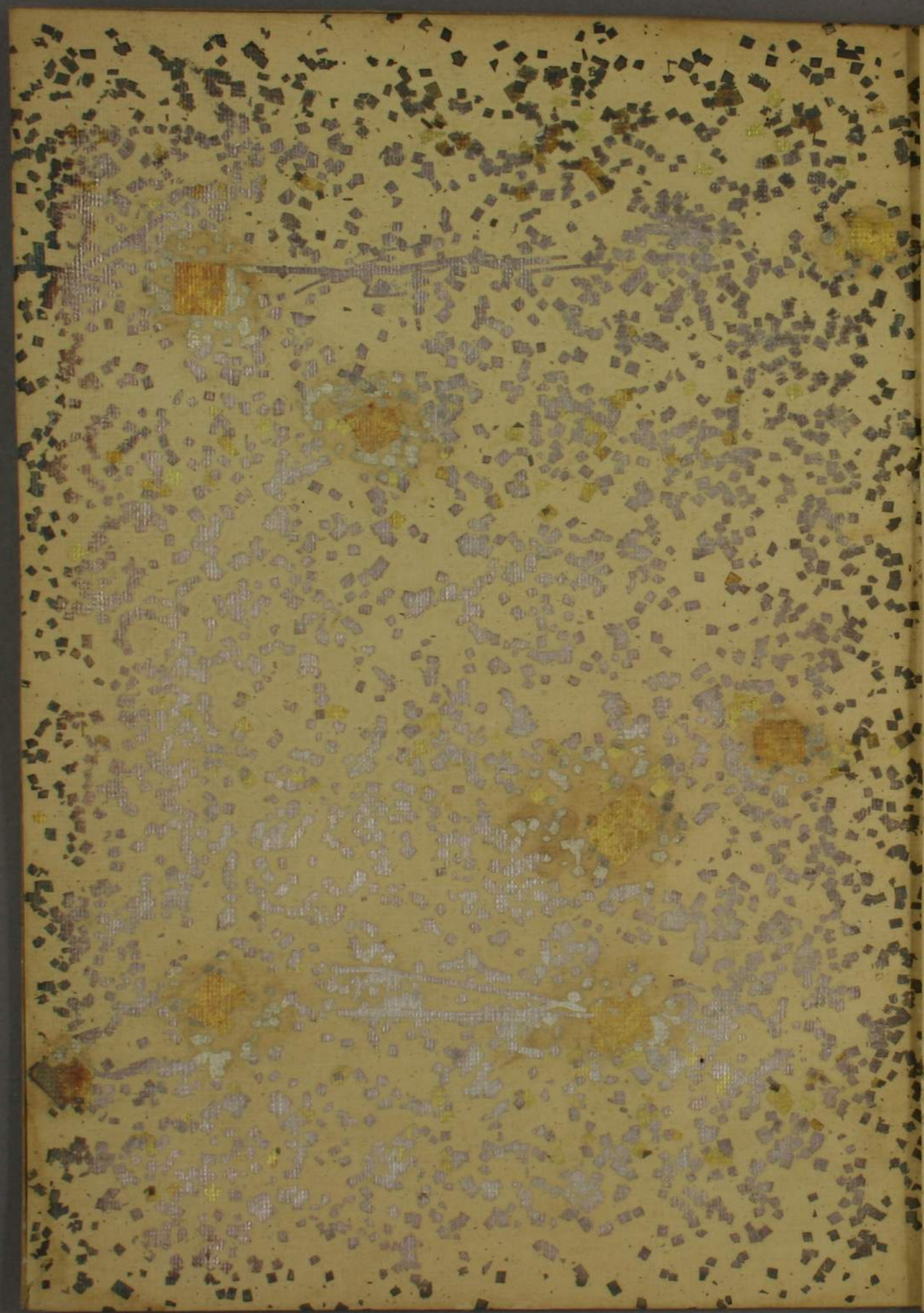
私源の伝く 竺年

ををいをををををををををををを
花
をの美いをりをををををををを
をを節の事をとの伝ををを乃音を
をををををををををををををを

いとことせ
まかりそとり

源真人云　夜夢不須說

女乃つくとは男を信する兒女子
屋の物の不ぬん

源主人　見河海　みゆめまとも
ぬしかりしとも
とそとは又物の物語の筆法し
紫式部日記　作とんせしと

源氏物語
夕顔の巻　物をいふ
ものとも
恐怖乃